

7) 最近の口唇口蓋裂治療

—当科における出生直後からの治療体系について—

中野 久・大橋 靖	(新潟大学口腔外科 第二教室)
小野 和宏・永田 昌毅	
飯田 明彦・今井 信行	
神成 庸二・早津 誠	
碓井由紀子	

口唇口蓋裂は日本人で約500出生に1人の割合で発生し、審美障害のみならず哺乳障害や言語障害など機能障害を有する疾患である。私たちは近年、哺乳障害の改善と口腔機能の回復を考慮した出生直後からの治療体系に基づいて治療し、以下の成績が得られている。(Hotz床の装着)1983年から1995年までの口唇口蓋裂および口蓋裂、唇顎裂を合わせ257例にHotz床を装着した。哺乳床としての効果は、経口哺乳一日量の増加、哺乳所要時間の著明な短縮により健常者と変わらぬ体重増加が見られた。早期装着例で一層有効であった。顎發育誘導効果は早期からのHotz床装着により上顎の形態が改善した。(口唇形成)6か月時にCronin法、Tennison法により行う。(口蓋形成)1才6か月で軟口蓋形成を行い、5～6才で硬口蓋閉鎖を行う。この間言語管理、歯科的管理も平行して行う。本治療体系に基づいた患児は形態的にも機能的にも良好な結果が得られている。

8) ライ症候群類似の症状を呈した超低出生体重児の1例

堀田 広満・松永 雅道	(長岡赤十字病院 小児科)
竹内 一夫・山崎 肇	
佐藤 尚・今井 千速	
沼田 修・鳥越 克己	

症例は在胎28週、936gで出生し、気管支肺異形成のため74生日まで酸素投与を要した女児。111生日、大泉門膨隆、腹部膨満を認め、血液検査は、GOT 192 IU/l、GPT 245 IU/l、NH₃ 400 μg/dl、BS 7 mg/dl、髄液検査は、細胞数 0/3、初圧 170 mmHg であり、頭部CTで脳浮腫を認めた。臨床的ライ症候群を疑い、集中治療を開始した。経管栄養再開後、高アンモニア血症、腹部膨満を認め、経管栄養中止を要することを繰り返した。低蛋白による浮腫、腹水が進行し205生日に呼吸不全のため死亡した。剖検では、肝細胞内および管内胆汁うっ滞と中等度の脂肪変性を認めた。既報と同様に低栄養、長期間の酸素投与が発症に関与した可能性がある。MCT

オイルの発症への報告があるが、本症例では投与しておらず必ずしも関与するとは言えない。持続する低栄養が、慢性肺疾患の修復遅延および肝障害の慢性化を起こした一因と考える。

9) 生後30日以内に葛西手術が行われた胆道閉鎖症の3例の検討

山際 岩雄・小幡 和也
大内 孝幸・島崎 靖久 (山形大学第二外科)

胆道閉鎖症に対し早期手術が叫ばれながらも新生児期に手術される症例は全国アンケート調査によれば5%程度にとどまっている。当科では過去9年7か月で経験した症例は9例のみだが、うち4例が30日以内に葛西手術が行われた。この内6年を経過した3例はいずれも極めて良好な経過をとっている。3例とも満期正常産で出生。3例中2例で胎便の異常に気付かれ、3例とも高ビリルビン血症に対し光線療法がなされた。その際、総ビリルビン値のみでなく、直接型も計られ、閉塞性黄疸が疑われ、当科紹介となった。それぞれ、18日、25日、30日で葛西手術、人工腸便付加 Roux-en-Y が行われた。病型はいずれも肝門部閉塞型(Ⅲ型)だった。術後それぞれ55、81、97病日で総ビリルビン 1.0 mg/dl 以下となり以後再上昇はない。肝機能検査上もほぼ正常値をとっている。

10) 先天性横隔膜ヘルニア症例の検討

大沢 義弘・近藤 公男 (太田西ノ内病院
小児外科)

本院にて1993年10月以降、現在までに経験した本症は10例(93～96年10月、各1、2、5、2例)であるが、いずれも出生直後の発症例であり(出生前診断例は1例)、うち7例を救命した。

手術方針において、緊急手術とした94年までの3例中2例を失ったのに対し、95年からの待機手術(48時間以上)7例では6名を救命し得た。

死因として、前2例では1例は術中からの心停止に伴う呼吸循環不全、他は術後のチューブトラブルも関連した呼吸不全で、2例とも術直後に死亡したのに対し、後1例は心奇形(Co/A)も関与した重度の呼吸循環不全で、術後7日目に死亡した。